

ゆずきよ劇場

最後の
一葉

原作 O・ヘンリー

文／絵 ゆずきよ



親の反対を押し切って
画家を目指し上京してきた境遇の
ジョンコとスエは

誰が見ても分かるほど

仲が悪かったが

互いに貧乏なため

古アパートの2階で

共同生活を送っていました。



十一月

貧乏生活が祟り

流行り病いの肺炎にかかり

ジョンコは床に臥してしまいました。



おかげで生活のすべてを担う

羽目になってしまったスエダが

仲が悪いとはいえ相手は病人

自分が同じ立場になった時を思い

「キッチンと面倒みてやるわ」と

心に決めました。



けれどもジョンコは
毎日、一日中ベッドに横になって
窓の外を見つめるばかり。

「本人が治らないと思って

自分の最期ばかり考えている様では
どんな治療も薬も効きやしない。

前向きになるよう

もっとあんなが努力せにゃ」

医者にまでそう言われ

先の見えない看病と貧乏生活の不安で
スエは耐えきれず
独り泣き崩れました。



でも、泣いていても
時間ばかりが過ぎて行くだけで
一銭にもなりません。

部屋に戻ると

ジョンコは眠っている様なので
スエはさっそく明日がメ切りの
雑誌小説の挿絵の仕事に
取りかかりました。

しばらくすると

ジョンコの小さく低い声が聴こえてきましたが
スエは仕事の手を止めず
様子を伺いました。



「十二」「十一……」「十」
「九」……「八、七……」

ジョンコは窓の外を見ながら
数を逆に数えています。



窓から見える物といえば

今は空き家の、庭を隔てた隣家の壁と

それに這う根元の腐りかけた古い蔦だけ。

訳の分からない耳障りなそのつぶやきに

仕事の手も止まってしまったスエは



「いったい何なのよ？」

声を荒げてしまいました。



「また一枚…
可哀相にあの薦も面倒もみてもらえずに
独り最期を迎えるのね…私と同じ…
最後の一枚が散る時、私達一緒にいくんだわ
今日にもさよならかしら…」

気付かぬ様子で
続けるジョンコに
今度は耳元でハッキリと

「私は今、
あなたの分まで仕事を
してるのよ！」

バカな事言ってるんで
眠っててちょうだい」とスエは脅迫し
挿絵のモデルを頼んである
階下に住むクマさんを
呼びに部屋を出て行きました。



クマさんとは、六十を過ぎた画家で
その風貌からクマさんと呼ばれ
傑作こそはないが、長年の知識と人柄の良さで
2人に慕われていた。

ーと、言うのは建前で
実は、富豪の一人娘であるスエの
居所を見つけ出し、後の監視・報告の為
両親から雇われた「元画家志望」の探偵である。

「あそこまで無神経だとは思わなかったわ」
何も知らずに目の前で泣いてグチる
スエの様子も、
もちろん
報告されます。



粗方グチリ終えたスエは
しばらくの沈黙の後、決意した表情で
再び口を開きました。

「信頼するクマさんにだから打ち明けるわ。
私とジョンコはずっと仲が悪かったけど
私は、私が彼女の為に頑張ってる姿を見て
もしも彼女が心底感謝してくれたなら
病気が治った後、画家の道は諦めて

親の言う通り家に帰ってもいい、とキミエ
考えているのよ」

驚くクマさんに

「ジョンコには内緒よ」と釘を刺し
2人は階上へ戻って
行きました。



部屋に戻るとジョンコは眠っていたので
スエはカーテンを閉め、クマさんを隣室に招き
仕事に取りかかりました。

「ヤっつき、窓の外を見たら」

雪混じりの雨になっていたわ

風も強いし

きつと今夜中には薦の葉も散ってしまっわね。

最期の一枚が無くなってしまったら

今度は何を言って私を困らせるのかしら…

…彼女は…」

スエは独り言の様に

深いため息をつき

クマさんは黙って

ポーズをとっていました。





翌朝、ジヨンコは余程心配だったのか
自らカーテンを開け外を覗き込みました。

そこには

昨晚の嵐にも負けず、奇跡的に残った

一枚の鳶の葉がありました。

ジヨンコは上体を起こし

その、いつまで経っても散らない最後の一枚を
嬉しそうにずっと見つめています。

ひと晩経っても

また朝を迎えても

最後の一枚はそこにありました。

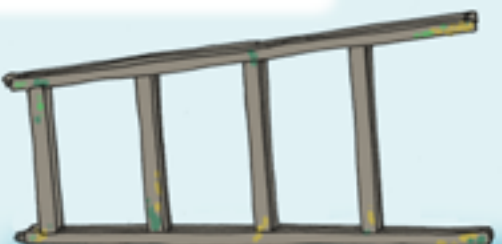


その日の午後、管理人がやって来て
昨日の午後
クマさんが急性肺炎で
入院していた事を教えてくれました。

「前夜の嵐の中どこへ行っていたのか
びしょ濡れで倒れていた所を
発見したのだが

そこには
絵筆や黄と緑の絵の具を溶いたパレット
ハシゴなどが転がっていた」
との事。

命に別状ないが
老人ゆえ長期入院になりそう
だとか…



「薦の葉が散らなければ
あなたは元気になって私に心底感謝する
と、思ってたんなら風の晩に
最後の一枚を描き上げたのね…」

「彼が自分の意志でやった事だ。
僕達は何ひとつ頼んじやいない。
入院が長引く事を
スエが気にする事はないさ」

「そっね
私を家に連れ帰って
報酬を頂こうなんて
欲張るからいけないのよ…」

…あのへボ探偵…」

二人は最初から

クマさんの正体を知っていたのでした。



事の真相はこうである。



お気付きの通りジョンコは本当は男です。

上京して出会い、ひと目で恋に落ちた二人は

「スエの親の手の者が必ずやって来る」と見込んで

初めから仲の悪い女同居人のフリをしながら

やはり現れたクマさんの監視の目から逃れ、

誰にも知られず二人の本当の第1歩を踏み出せる

この日を、少しずつ仕掛けていたのでした。

もちろんジョンコの病気も医者もウソです。

全ては

この日のために。



「さあ、時間がないわ
荷造りを始めましょう！」

二人は思う存分
ドタバタと音をたてて
部屋とアトリエを
行ったり来たり
走り回ります。

監視の目はありません。

大急ぎで
必要最低限の荷物を
まとめ上げていきました。

自然と笑みが
こぼれてきます。



荷造りを終えた二人は

もう一度

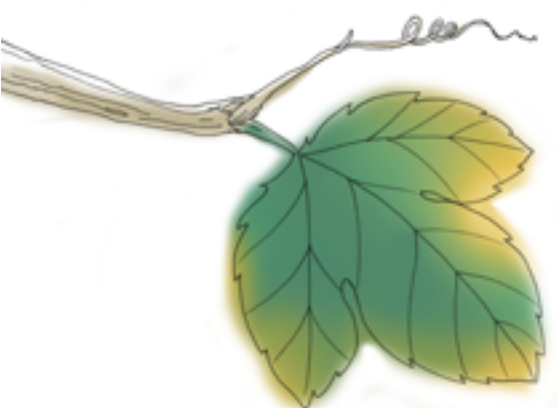
隣家の蔦の最後の葉をしっかりと確認し

そしてカーテンをしっかりと閉め直しました。

カーテンが

二人の手によって開かれる事は

二度とありませんでした。



SPECIAL THANK'S



HAJIME chan



NOPPU kun

19745°